

1 研究の概要

(1) 研究テーマ

支え合う人間関係を築くための支援の在り方
 ーピア・メディエーションに関する活動プログラムの開発ー

(2) 研究テーマ設定の趣旨

<子どもの現状>

近年、少子化や核家族化、地域社会の変化などによって児童生徒の人間関係が希薄になり、いじめや不登校などの生徒指導上での様々な問題が深刻化しています。佐賀県においても、平成26年度佐賀県教育の基本方針の中で、不登校や問題行動、いじめの問題への対応について述べられています。特に、いじめの問題においては、いじめ防止対策推進法が施行されたことに伴い、いじめの未然防止や早期発見・早期対応及び被害の最小化、再発防止に向けた取組を更に充実させることが求められています。

森田(2001)は、いじめは四層構造であることを指摘しており(図1)、『いじめの国際比較研究』(調査対象：小学5年生～中学3年生)において、日本では学年が上がるとともに、傍観者は26.4%から61.7%へと増え続け、仲裁者は53.5%から21.8%へと減り続けていることを明らかにしています。また、池島(2013)は、子どもたちの人間関係が希薄なため、級友のちょっとした言動に傷付いたり、ピア・プレッシャー(仲間による同調圧力)により、いじめに対して注意できない状況が生まれたりすることを指摘しています。一方、内閣府の低年齢少年の生活と意識に関する調査(平成19年2月、調査対象：小学4年生～中学3年生)では、「何か困ったことや悩みがあったとき誰に相談するか」という質問に対して「友達」と答えた児童生徒は65.5%であることから、困ったことや悩みがある場合には、6割以上の児童生徒が友達の力を必要としていると言えます。

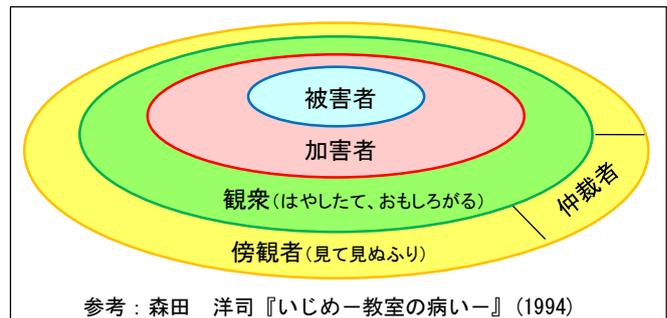


図1 いじめの構造

<ピア・メディエーションの必要性>

池島(2013)は、「ピア・メディエーションとは、『子ども同士による調停』を意味し、子ども同士のトラブル・もめごとと問題に対して、子どもたち同士で解決を図ろうとする活動¹⁾と述べています。学校では、トラブル・もめごとは日常的に起きるものであり、教師が児童生徒の全てのトラブルに関わって対応していくことは難しい現状があります。しかし、児童生徒同士で解決を図ろうとする態度が身に付いていけば、いじめ等の深刻な問題に発展する前のトラブル・もめごとの段階で解決することができると考えます。

<研究のねらい>

本研究では、児童生徒の発達の段階に応じて、トラブル未然防止やトラブル解決のスキルについて計画的に学習することができるような活動プログラムを作成します。活動プログラムは、トラブルが起きるときに抱く感情の学習やトラブル未然防止のスキル学習、トラブル解決のスキル学習で構成します。児童生徒がこの活動プログラムを学ぶことは、周りの出来事に関心をもち、周りの人と積極的に関わろうとする意欲につながると考えます。

(3) 研究目標

県内の小・中・高等学校における児童生徒同士のトラブルに関する実態調査を行い、トラブルが起きるときに抱く感情の学習やトラブル未然防止のスキル学習、トラブル解決のスキル学習を併せた、ピア・メディエーションに関する活動プログラムを開発する。

(4) 研究方法

- 先行研究や文献を基にしたピア・メディエーションについての理論研究
- 県内の小・中・高等学校における児童生徒同士のトラブルに関する実態調査及び活動プログラムの開発
- ピア・メディエーションに関する活動プログラムの実践及び実践後の修正プログラムの提案

(5) 研究内容

- ピア・メディエーションについての先行研究調査や文献研究を行う。
- 県内の小・中・高等学校の児童生徒及び教師を対象に、トラブルの場面やトラブルへの対応について、質問紙による調査を行う。
- トラブルが起きるときに抱く感情の学習やトラブル未然防止のスキル学習、トラブル解決のスキル学習を併せた、ピア・メディエーションに関する活動プログラムを作成する。
- 県内の小・中・高等学校において、作成した活動プログラムを実践し、トラブル解決に関する児童生徒の意識の変容から活動プログラムの有効性を探る。

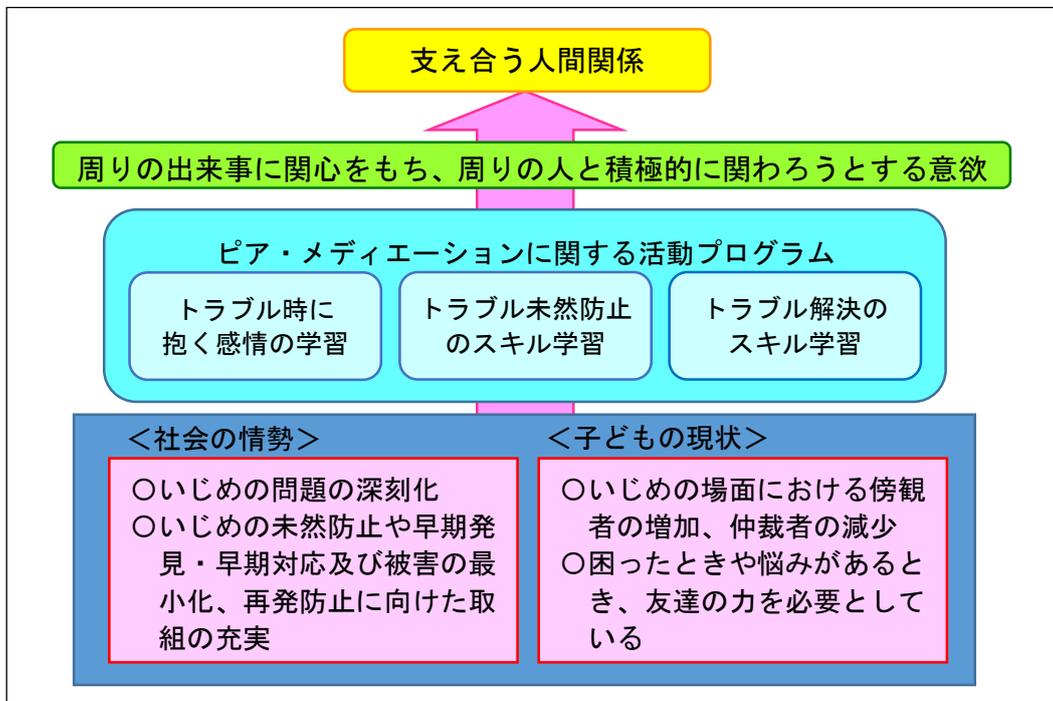


図2 研究構想図

引用文献

- 1) 池島 徳大 『月報 司法書士』 2013年6月 p.14